随想 62

桜に寄せて　佐々木伸子（津古）

▲佐々木さん（前列右から２人目）と
津古ふるさと会のメンバー（一部）

早春、まだ少々、肌寒さが残る頃、私は心ワクワク待ち望むことがある。それは“桜の開花”。我が家は宝珠川の河畔にある。近頃ここは隠れた桜の名所であるらしく、時節には多くの見物の人たちで賑わう。

20年ほど前、地域の古老の方々が苗木を植えたのが始まりで、１メートル程の頼りなげな苗木が今ではたっぷりの花を咲かせるまでになった。枝を伸ばし、川面に花影の映る様はなかなかよい風情である。

両親に手を引かれた小さな子ども達、車椅子のご老人など、どの方も表情ほんのりと満開の桜を楽しんでおられる。お互いあいさつを交わし、ここが小さなコミュニティの場所となっているのを感じる。

私も当地に嫁いだばかりの頃は、この自然の風景に感動多々あり、随分と心癒されたものである。都会では経済性、利便性が優先されて身近にこのような場所は少ない。

近年このあたりも都市化が進み、少しずつ自然が減ってきているように思う。豊かな自然を大切に、なるべく今のまま次世代に残さなければ“もったいない”と思っていた。

そんな中、昨年６月、地域の有志によって「津古ふるさと会」が発足した。私もその一員に参加させていただいて、月一回の川周辺の清掃や花植えなどのお手伝いをしている。今では鯉が泳ぎ（有志の方が放流して下さった）、川遊びの子ども達の声が響いて、四季折々、憩いの場となっている。自然を守ることは努力のいることではあるが、人が集い、身近に心安らぐ癒しの場所があるということは素晴らしいことである。

末永く今の風景が残り、来春も満開の桜が皆を楽しませてくれることを祈っている。

◇◇◇